

紹介

「世界の研究室から」

(臨床環境10:42~44, 2001)

留学記 古都ボストンより

— Joslin Diabetes Center —

安孫子 徹

旭川医科大学眼科学教室

Toru Abiko

1999年6月から、旭川医科大学眼科学教室より、ボストンの Joslin Diabetes Center、Eye Research Section、Dr. Sven-Erik Bursell のもとに留学しています。Joslin Diabetes Center は、世界で初めてインスリンを臨床応用した施設で100年の歴史があり、糖尿病研究のために日本からも多くの研究者たちが留学しています。この施設はボストン市のメディカル・エリアに立地し、周辺には世界的にも有名な病院が建ち並び、それぞれが独自の研究所を持っています。そのほとんどが、ハーバード大学の関連施設であり、有り難いことに私もハーバード大学医学部の図書館を自由に利用することができます。こちらの病院は基本的に完全予約制で診療を行っているため、日本の大病院のように待合室が満杯ということはなく、医療スタッフも患者さんたちもゆとりがあるように思われます。また、待合室にはきれいで大きなソファ、床には絨毯、静かな BGM、それに間接照明が施され、患者さんがくつろぎやすい環境作りがなされており、本当に感心させられます。医師の立場から、このような環境で診療を行っているこちらの医療体制をとて羨ましく思います。反面、初診時でも必ず予約が必要で、何日か後でないと予約が一杯のため診察してもらえないということもあり、この点においては、いつ受診しても診てもらえる日本の病院の方が患者さんには都合が良いのかもしれませんが。このような医療体制のためか救急室は大変混んでおり、3時間待ちというのは当たり前です。日本の医療体制とアメリカの医療体制には一長一短があると思いますが、リラッ

クスできる待合室の作り方は、是非日本の大病院にも取り入れてもらいたいものです。



写真1 ヨーロッパのたたずまいを思わせるニューベリー通り。レンガ造りの建物が連なり、その1・2・地階には、ブティックやカフェ、レストランなどが入っています。

アメリカ東海岸に位置するボストンは、1620年、最初にピルグリム・ファーザーズがプリマス（ボストンから車で1時間ほど南下した町）に着いてから10年後の1630年に建設された古い街で、歴史的な街として多くの共通点を持つ日本の京都と姉妹都市になっています。そのためか、町並みは典型的なアメリカの都市とは異なり、ヨーロッパのたたずまいを思わせます。煉瓦造りの建物が多く、私の第一印象は「茶色い街」でした。ボストン市自体の人口は60万人弱ですが、ハーバード大学のあるケンブリッジ市などの周辺都市を合わせると600万人ほどになり、ボストン都市圏は全米第7位の大都市となります。ボストンは海が近いこともありシー・フードが美味しく、特にロブス

ターとニュー・イングランド・クラム・チャウダーというスープが有名です。スーパー・マーケットに行くと生きたロブスターが売っており、これを蒸し焼きにすることで家庭でもおいしくロブスターを味わえます。また、夏にはチャウダー・フェスティバルがあり、各レストランが自慢の味を競います。私もこれに参加したのですが、真夏の大変暑い日だったので、汗を拭きながら一番おいしかったレストランに投票した覚えがあります。ボストンは緯度的に札幌と函館の中間あたりに位置し、気候もそのあたりと似ているように思われます。このため、冬は寒く雪が積もることもあり、関西や九州から留学されている先生方は震え上がっています。私自身は、冬にはマイナス30度近くまで気温が下がり、1年の3分の1は雪で道路が覆われるという極寒の地、旭川の出身であるため、旭川にとっての「冬の始まり」程度のボストンの冬は実に快適で、楽チンこの上ありません。逆に、冬には鼻毛が凍る寒さと雪かきの毎日が待っている旭川に戻り、また生活していけるかどうか不安になります。



写真2 フリート・センターにて、妻とプロ・バスケットボールの試合を観戦。床は一晩でスケート・リンクにも早変わりします。

ボストンには世界的に有名なハーバード大学、マサチューセッツ工科大学を始めとして60にも及ぶ大学があり学問の街として知られていますが、加えて、芸術の街としても知られています。小沢征爾が指揮するボストン交響楽団は市民にも親しまれており、昨年はその活動の舞台となっているシンフォニー・ホールの100周年記念として、無

料ですばらしいコンサートを見ることができました。また、ボストン美術館は世界的にも有名で、特にフェノロサや岡倉天心等の努力により収集され最良の状態で保存されている浮世絵は、日本でもなかなか見ることのできない貴重なものです。更にボストンには歴史のある立派な劇場もあり、バレエ、オペラ、ミュージカルなど、旭川ではまず見ることのできない貴重な舞台を見ることができました。その他、プロのフィギュア・スケート・ショーや、プロ野球大リーグ、NBA（プロ・バスケットボール）、NHL（プロ・アイスホッケー）などのスポーツも観戦する機会がありアメリカ文化の一端に触れることができたように思います。このようにボストンは大変魅力的な街ですが、住居費が高いのには閉口します。ニューヨークに比べればまだ良いのですが、セキュリティのしっかりしているアパートだと、1LDKの部屋でも月に1500ドルは下りません。日本円にして20万円以上支払っている先生もいらっしゃいます。しかも、年々アパートは古くなっていくにもかかわらず、部屋代は毎年上がっていきます。しかしながら、ボストンはアメリカの中では安全な街で日本食料店などもあり、住居費の問題を除けば日本人にとって住み易い街と言えるでしょう。



写真3 私達が住んでいるアパートの外観。25階建てで、1階にはフード・コートやドラッグ・ストアがあります。

先にも述べましたように、Joslin Diabetes Center は歴史のある糖尿病研究機関で、糖尿病及びその合併症の発症メカニズムや治療法についての研究が盛んに行われています。生活習慣病である糖尿病は、日本でもアメリカでも年々患者数が増加しており、現代人の重大な問題の一つとなっています。アメリカでは昼食時ともなると、ファースト・フード店の集まったフード・コートは人であふれかえります。大きな体で大きなハンバーガーとフライド・ポテト、そして巨大なコーラを飲んでいるアメリカ人をたくさん見ることができます。そのような光景から、なるほど肥満や糖尿病の人口が増えていくことが納得できます。一方で、スーパー・マーケットには Fat Free の食品が多く並び、また毎日ジョギングをしたりフィットネス・クラブで汗を流す人も多く、健康に気を使っている人たちもいるのですが……。1999年に当研究室より発表された、1型糖尿病患者におけるビタミンE投与が、早期合併症の変化である網膜血流や腎血流の異常を正常化させたという論文は世界的に注目されました。私達は、更にこの効果についての基礎的証明、網膜微小循環を規定している様々な因子との関わりについて研究中です。現在当研究室のスタッフは、Bursell 先生を中心に、動物実験に詳しく、またいろいろと私達の世話を焼いてくれる Allen Clermont 氏、名古屋大学眼科から留学されている堀尾直一先生、私の妻で旭川医大第二内科より留学している安孫子亜津子、それに私で構成されています。また、本年1月までは、網膜血流測定用のプログラムなどいくつかの有用なプログラムを作ってくれたコン

ピューター・プログラマー、Brett Shoelson 氏が在籍していました。Bursell 先生は穏和なお人柄であり、よくお笑いになる方で人望もあります。その笑い声は印象的で、Bursell 先生が笑っている姿を見ているだけでこちらまで幸せな気分になります。また、つたない英語をしゃべる私たちの言うことをよく聞き入れてくれ、実験に行き詰まった時などには適切な助言を下さいます。私はこの留学を通して、単に実験とか研究ばかりについてではなく、人としてあるべき姿についても学んでいるような気がします。

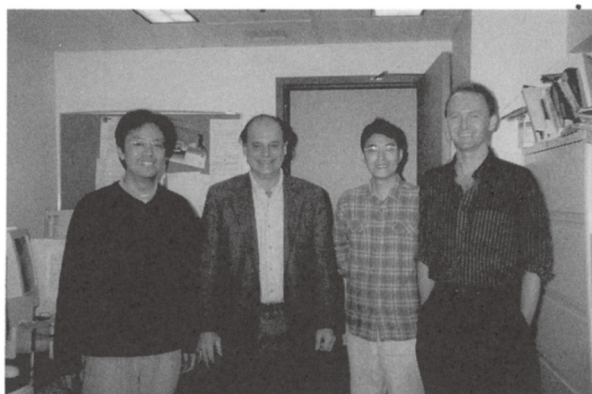


写真4 ラボにて。右より Clermont 氏、堀尾先生、Bursell 先生、筆者です。

このように、現在私は大変貴重な経験をさせていただいておりますが、帰国後もこの経験を臨床、研究に生かし、より良い人生を送れるよう努力していきたいと思っております。最後に、このような機会を与えて下さった旭川医科大学眼科学講座教授、吉田晃敏先生に、この場を借りて深謝致します。